1937-56年ヒンドゥー法の法典化に関する覚書(1)	東洋文化	34	39—3
ヒンドゥー寺院について	AA地域連絡季報	15	41—3

鈴木　敬

山水画様式の系譜	「世界美術全集」(角川書店)		
画学を中心とした徽宗画院の改革と院体山水画風の成立	東洋文化研究所紀要	38	40—10
明代画院制について	美術史学	59	40—12

大野盛雄

イラン農村の社会経済構造の研究 ——第一部サーアトルウ村(レザイエ)の例——	東洋文化研究所紀要	38	40—10
同 ——第二部ベヘジャットアーバード村(エスファハーン)の例——	東洋文化研究所紀要	39	40—12
同 ——第三部ケイルアーバード(シーラーズ)の例——	東洋文化研究所紀要	40	41—3
農村調査に関する若干の問題 ——イランのデヘ(むら)について	アジア経済	7—1	41—1
日本農業考察のための一試論	思想	499	41—1

尾上兼英

＊＊幽明録	「幽明録・遊山窟他」(平凡社)		40—5
小説における「明時代」——序論	中国文学研究	3	39—12
今古奇観の文学	「中国の八大小説」(平凡社)		40—6

西嶋定生

＊日本国家の起源(編著)	至文堂		39—12
古墳と大和政権	岡山史学	10	36—11
古代史学の問題点	「古代史講座」(学生社)	1	36—11
六—八世紀の東アジア	「日本歴史」(岩波書店)	2	37—6
中国奴婢制の再考察 ——その階級的性格と身分的性格——	「古代史講座」(学生社)	7	38—3
日本史の理解を世界史的に ——アジアの中の日本——	教室の窓	49	38—6
秦漢時代の農学	「古代史講座」(学生社)	8	38—8

築島謙三

＊文化心理学基礎論	東洋文化研究所		37—11
＊ことばの社会心理	明治図書		39—9
＊ラフカディオ・ハーンの日本観 ——その正しい理解への試み——	勁草書房		39—11
現代生活と現代国語	講座・現代の話し方と文章		36—11
言語心理学	児童心理		36—11, 12
ハーンとチェンバレン ——日本文化観をめぐって——	東洋文化研究所紀要	26	37—2
生保内住民のパーソナリティ（共著）	年報・社会心理学	4	38—6
調査の回観〔九学会連合による調査について〕	人類科学	16	39—3
羽茂住民の調査結果	佐渡—自然・文化・社会—		39—3
言語と文化 ——ワーフの学説をめぐって——	石田英一郎教授還暦記念論文集		39—7
日本観の省察——ハーンからオールコックをふりかえって——	東洋文化	39	40—3
Hearn versus Benedict	Japan Quarterty,	12	40—7, 9
マレー人の民族意識	東南アジア研究	3	40—9
マラヤ統治の推移 ——「マラヤ連合」から「マレーシア」まで——	東洋文化	40	41—3
人間と文化	講座「社会と倫理」	1	41—3
言語理論	国語学	65	41—6
マラヤの民族と文化の多様性の由来	東洋学術研究	5	41—7
マラヤの村の自治	東南アジア研究	4	41—9

松井　透

イギリスのインド支配の論理 ——ヨーロッパの自意識とアジア観——	思想	489	40—3
J.F.スティーヴンの政治思想 ——自由の批判・帝国の擁護——	思想	498	40—12
チャールズ・グラントの思想 ——イギリス人のインド支配とインド観——	インド文化	6	41—7

鎌田茂雄

＊中国華厳思想史の研究	東大出版会		40—3
中唐の仏教の変動と国家権力	東洋文化研究所紀要	25	36—11

中国禅思想史にあらわれた無情仏性思想	宗学研究	4	37—3
華厳思想史におよぼした僧肇の影響	印度学仏教学研究	10—2	37—3
道生の頓悟思想とその展開 ——華厳思想との関連をめぐって——	駒沢大学仏教学部研究紀要	20	37—3
宝蔵論の思想的意義	宗教研究	171	37—3
智儼の宗教の思想史的役割 ——仏教の中国的変容をめぐって——	駒沢大学仏教学部研究紀要	21	37—10
宝蔵論と三論元旨	印度学仏教学研究	11—2	38—3
道教々理の形成におよぼした仏教思想の影響—道教義枢を中心として—	東洋文化研究所紀要	31	38—3
亡名息心銘考	宗学研究	5	38—4
華厳思想の形成に果した空観の役割	密教文化	64・65	38—11
近代中国史と仏教	宗教研究	177	39—1
清涼澄観の心性説	駒沢大学仏教学部研究紀要	22	39—3
浄影寺慧遠における大乗思想の展開	東洋文化研究所紀要	34	39—3
究意大悲経について	印度学仏教学研究	12—2	39—3
三論元旨について ——仏道両思想融合の一例——	結城教授頌寿記念仏教思想史論集		39—3
北周廃仏と禅	宗学研究	6	39—4
杜光庭「太上老君説常清浄経註」について——唐代宗教思想史研究の一資料——	宗教研究	38—2	40—3
中国南北朝時代の華厳研究序説	駒沢大学仏教学部研究紀要	23	40—3
華厳経のめざすもの	理想	388	40—9
法界縁起について	宗教研究	186	40—10
海印三昧について	駒沢大学仏教学部研究紀要	24	41—3
浄影寺慧遠の法観念	印度学仏教学研究	14—2	41—3

板垣雄三

アラブ民族主義とイスラム ——思想ムスリム同胞団をめぐって——	思想	449	36—11
1961年度歴史学界回顧と展望 西南アジア近代	史学雑誌	71—5	37—3
エジプト史において1930年代がもつ意義	「現代歴史学の課題」(歴史学研究別刷)		38—3

オラービー運動(1879-82)の性格について	東洋文化研究所紀要	31	38—3
ムスリム同胞団の解体について	イスラム世界	1—1	38—10
日本における近代史研究の若干の問題	歴史学研究	285	39—2
フサイン・マクマホン書簡とその周辺	ソビエト科学アカデミー版「世界史」月報	22	39—6
日本における現代アラビアへの関心	サウディアラビア	15	39—6
アラブ社会主義論(上)	思想	483	39—9
政治組織と指導理念	「中東の社会変動」(アジア経済研究所)		40—1
歴史家と現代	堀米庸三編「現代歴史学入門」(有斐閣)		40—2
エジプト近代史家のプロフィル	東洋文化	38	40—3
エジプトにおけるナポレオン・ボナパルトの宣言文	東洋文化	38	40—3
アラブ連合共和国・国民憲章(翻訳)	アジア経済研究所		40—3
M. Halpern: The Politics of Social Changes in the Middle East and North Africa(書評)	The Developing Economies	3—1	40—3
エジプトの近代と日本	イスラム世界	4	40—9

甘粕　健

*ファハリアンI(執筆分担)	東洋文化研究所		38—3
*姉崎山王山古墳(共著)	市原市教育委員会		38—10
*デーラマンI(執筆分担)	東洋文化研究所		40—3
武蔵(共同執筆)	古代学研究	30	37—2
弥生文化・古墳文化	「日本史研究入門」(II)(東大出版会)		37—3
内裏塚古墳群の歴史的意義	考古学研究	39	38—12
前方後円墳の性格に関する一考察	「日本考古学の諸問題」(河出書房)		39—6
前方後円墳の研究——その形態と尺度について——	東洋文化研究所紀要	37	40—3
全堀された前方後円墳——横浜市軽井沢古墳——	科学読売	1965—12	40—12
江上波夫著「日本美術の誕生」解説(協力執筆)	平凡社		41—1

古墳文化の地域的特色——序説——	「日本の考古学」(河出書房) 4		41—6
古墳文化の地域的特色——関東——（共同執筆）	「日本の考古学」(河出書房) 4		41—6

石田米子（旧姓　山下）

辛亥革命の時期の民衆運動——江浙地区の農民運動を中心として——	東洋文化研究所紀要	37	40—3
反帝反封建の革命の時期	「アジアアフリカ研究入門」（青木書店）		40—12

梶村秀樹

＊朝鮮近代史の手引（共著）	日本朝鮮研究所		41—3
＊＊日本に訴える——韓国の思想と行動（共訳）	太平出版社		41—10
「不正蓄財処理問題」と南朝鮮の隷属的独占資本	朝鮮研究（月報）	26/27, 31	39-3, 7
朝鮮近代史の若干の問題	歴史学研究	288	39—5
南朝鮮の支配構造といわゆる隷属資本	朝鮮研究会報	8	39—5
乙己「保護」協約	朝鮮研究	36	40—1
農業協同組合の里単位統合（1958年）について	朝鮮研究	38	40—4
北朝鮮における農業協同化運動（1953—58年）についての一考察	朝鮮学報	39／40	41—4
朝鮮の郡協同農場経営委員会について	東洋文化研究所紀要	41	41—10

黒田和彦

周辺の文化——前２～１千年紀のアナトリア，シリア，イラン	「西アジアの文化」(河出書房)		41—4

山之内正彦

＊＊神仙伝・妬記・録異伝	「幽明録・遊仙窟他」(平凡社)		40—5

松谷敏雄

イラン北西部デーラマン地方の考古学的調査	日本人類学会民族学会連合大会19回記事		41—9

浜島敦俊

1995年の歴史学界回顧と展望・中国明清	史学雑誌	75—5	41—5

加藤祐三

＊＊ホー・チ・ミン　人とその時代（共訳）	東邦出版社		41—4
土地改革と基層政権の確立過程 ——華北人民政府の成立をめぐって——	歴史学研究	313	41—6

中村平治

インドの独立とその政治過程 ——ネルー・パテール体制の考察	東洋文化研究所紀要	25	36—10
ローカマーンヤ・ティラク ——帝国主義批判の視角	「世界の歴史」(筑摩書房)	13	37—2
インド現代史の開幕とその基礎条件	東洋文化	34	38—2

古賀正則

独立前の国民会議派の鉱工業政策と1948年の産業政策に関する表明 ——インドにおける国営鉱工業部門の発展について(一)——	東洋文化研究所紀要	27	37—3
インドの農民運動と土地改革——全インド農民組合の成立から土地改革法成立に至るまでの——	東洋文化	34	38—2

関　寛治

アナトール・ラパポート「戦争・ゲーム・論争」(書評)	国際問題	22	37—1
日中軍事協定成立史序論	東洋文化研究所紀要	26	37—2
K・ノール，S・ヴァーバ編「国際体系——理論的エッセイ集——」	アジア経済	3—8	37—8
抑止戦略体制のモデル論的分析	思想	461	37—11
Political Studies on Modern China	Developing Economics	2	38—1
満州事変前史	「太平洋戦争への道」(毎日新聞社)	1	38—2
危機の認識	中央公論		38—2
タイ国の政治と国際関係	「世界地理風俗大系」(誠文堂新光社)	8	38—2
現代史における資料の利用	岩波講座「日本歴史　現代4」月報		38—7
タイ国の政治とナショナリズム	喜多村浩編「タイの経済開発」(アジア経済研究所)		38—12

タイ国の経済開発の組織	同　上		38—12
国際体系シミコレーション研究の基礎	中央大学法学新報		39—2

近　藤　邦　康

章炳麟における革命思想の形成 ——戊戌変法から辛亥革命へ——	東洋文化研究所紀要	28	37—3
「近代化」と民族——中国のばあい	思　想	454	37—4
「民国」と李大釗の位置 ——辛亥革命から五四運動へ——	思　想	476	39—2

木　山　英　雄

水滸伝の背景	「中国の八大小説」(平凡社)		40—6
「野草」的形成の論理ならびに方法について——魯迅の詩と〝哲学〟の時代——	東洋文化研究所紀要	30	38—3

松　丸　道　雄

1962年歴史学界回顧と展望中国殷周	史学雑誌	72—5	38—5
殷墟卜辞中の田猟地について ——殷代国家構造研究のために——	東洋文化研究所紀要	31	38—3
日本散見甲骨文字蒐彙(四)	甲骨学	10	39—7
クリュコフ『卜辞に見えた「衆」と「衆人」について』(翻訳)	甲骨学	10	39—7
殷代王室の世系	世界史の研究	43	40—4
1964年歴史学界回顧と展望・中国殷周	史学雑誌	74—5	40—5

C　東洋文化研究所紀要

第 25 冊（昭和36年11月）

初唐仏教の思想史的矛盾と国家権力との交錯……結　城　令　聞
中国社会の同族と族長権威
——とくに明代以後の族長罷免制度——……仁井田　陞
人民民主統一戦線と人民民主独裁
——民族ブルジョアジーの側面から——……福　島　正　夫
丁玲批判について……竹　内　実
中唐の仏教の変動と国家権力……鎌　田　茂　雄
チモールの諸王国……大　林　太　良
インドの独立とその政治過程
——ネルー＝パテール体制の考察——……中　村　平　治

第 26 冊（昭和37年 2 月）

ハーンとチェンバレン
——日本文化観をめぐって——……築　島　謙　三
「西田哲学」研究史覚書……宮　川　透
イラン立憲革命の性格について……加賀谷　寛
1918年日中軍事協定成立史序論
——寺内内閣における対中国政策決定過程の構造的分析——…関　寛　治

第 27 冊（昭和37年 3 月）

「土地問題」と土地改革論の展開……川　野　重　任
先秦貨幣雑考……関　野　雄
初期の功過格について……吉　岡　義　豊
沖ノ島出土瑠璃碗断片考
——ギラーン州出土の浮出し切子装飾の瑠璃碗

に対する私見――……深　井　晋　司
華北五代王朝の文臣官僚……西　川　正　夫
中国現代教育史年表(Ⅰ)……新　島　淳　良
第 28 冊（昭和37年 3 月）
北方ユーラシアにおける頭皮剝奪の風習
――スキタイの起源の問題によせて――……江　上　波　夫
アジア諸国の経済開発と開発理論……原　　覚　天
北朝の均田法規をめぐる諸問題……堀　　敏　一
日本同族構造の分析
――社会人類学的考察――……中　根　千　枝
独立前の国民会議派の鉱工業政策と1948年の産業政策に
関する声明
――インドにおける国営鉱工業部門の発展について㈠――古　賀　正　則
章炳麟における革命思想の形式
――戊戌変法から辛亥革命へ――……近　藤　邦　康
中国現代教育史年表(Ⅱ)（1934―1948）……新　島　淳　良
東洋文化研究所要覧　補正
第 29 冊（昭和38年 1 月）
吐魯番発見の高昌国および唐代租田文書……仁井田　　陞
長春真人とその西遊……窪　　徳　忠
ギラーン州出土切子装飾瑠璃壺に関する一試論……深　井　晋　司
宋代土地所有制にみられる二つの型
――先進と辺境――……柳　田　節　子
《人民》の自己認識とその組織
――義和国民話の世界――……竹　内　　実
中国現代教育史年表(Ⅲ)（1949～1958）……新　島　淳　良

第 30 冊（昭和38年 3 月）

ソ連農業企業とその問題……福　島　正　夫

『野草』的形式の論理ならびに方法について

——魯迅の詩と〝哲学〟の時代——……木　山　英　雄

夏目漱石の問題㈡

——『文学論』を中心に——……生　松　敬　三

バクトの世界……飯　塚　浩　二

第 31 冊（昭和38年 3 月）

殷墟辞中の田猟地について

——殷代国家構造研究のために——……松　丸　道　雄

道教教理の形成におよぼした仏教思想の影響

——道教義枢を中心として——……鎌　田　茂　雄

オラビー運動の性格について（1879～1882）……板　垣　雄　三

第一次大戦後の地方行政……大　島　美津子

結城令聞教授略歴・著作目録

第 32 冊（昭和39年 3 月）

日本における民族の形成と国家の起源……江　上　波　夫

穂落神

——日本の穀物起源伝承の一形式について——……大　林　太　良

明治期における日本人のアフリカ観……西　野　照太郎

戦争末期の南満州における経済事情と労務管理

——密輸，行政供出と攤派，把頭制度，その他——……飯　塚　浩　二

第 33 冊（昭和39年 3 月）

満州事変をめぐる日本の外交……植　田　捷　雄

北宋末の公田法の華北の諸叛乱……周　藤　吉　之

「ヒキ」の分析

——奄美 双系(バイラテラル) 社会の血縁組織——……中　根　千　枝
デリーに現存する奴隷王朝初朝の墓について……荒　　松　雄
第 34 冊（昭和39年３月）
浄影寺慧遠における大乗思想の形成……鎌　田　茂　雄
教団組織論序説
——産業社会における教団体制の変容——……井　門　富二夫
デリーに現存する奴隷王朝中期の墓について……荒　　松　雄
仁井田陞教授略歴・著作目録
彙　報
第 35 冊（昭和40年２月）
ペリオ敦煌発見唐令の再吟味
——とくに公式令断簡——……仁井田　　陞
刀銭考……関　野　　雄
本願寺の家憲と「家」制度……森　岡　清　美
戦争末期の蒙彊
——中国の秘密結社，その他——……飯　塚　浩　二
デリーに現存する奴隷王朝末期の墓について……荒　　松　雄
第 36 冊（昭和40年３月）
ハッサニ・マハレ遺跡出土の突起装飾瑠璃碗に関する一考察……深　井　晋　司
デリーに現存するサルタナット時代の堰提および水門の遺跡について——サルタナットの首都デリーとその遺跡に関する歴史的研究Ⅳ——……荒　　松　雄
第 37 冊（昭和40年３月）
前方後円墳の研究
——その形態と尺度について——……甘　粕　　健
辛亥革命の時期の民衆運動

——江浙地区の農民運動を中心として——……山　下　米　子
政教分離に関する政策資料
——特に宗教教育の問題をめぐって——……井　門　富二夫
植田捷雄教授略歴・著作目録
第 38 冊（昭和40年10月）
メソポタミヤ北部の初期農耕村落文化に関する一考察
——第四次イラク・イラン遺跡調査団の発掘（1964年）
を中心として——……江　上　波　夫
曽　野　寿　彦
堀　内　清　治
三　宅　俊　成
イラン農村の社会経済構造の研究
——その実態調査 I ——……大　野　盛　雄
画学を中心とした徽宗画院の改革と院体山水画様式の成立……鈴　木　　敬
戦争末期における熱河および興安地区
——満蒙旅行のリポート，第四部——……飯　塚　浩　二
第 39 冊（昭和40年12月）
宋代浙西地方の囲田の発展
——土地所有制との関係——……周　藤　吉　之
中華人民共和国法理論の諸問題
——北京科学シンポジウム，中国「法学研究所」の研究
旅行報告をかねて——……針　生　誠　吉
いわゆるパルティア・ササン期の古墳墓について
——第四次イラク・イラン遺跡調査団の発掘（1964年）
を中心として——……江　上　波　夫
曽　野　寿　彦

池田次郎
深井晋司

イラン立憲革命の性格について（続篇）
——イラン近代史とバクティヤーリー族社会の変動——…加賀谷　寛

イラン農村の社会経済構造の研究
——第二部ベヘジャットアーバード村（エスファハーン）の例——……大野盛雄

第40冊（昭和41年3月）

社会主義社会における矛盾と法
——中国法理論の新動向——……福島正夫

刀銭考補正……関野　雄

烏勧請
——東亜，東南アジアにおける穂落神話に対応する農耕儀礼——……大林太良

イラン農村の社会経済構造の研究
第三部ケイルアーバード（シーラーズ）の例……大野盛雄

北満における白系露人の入植地ロマンノフカについての所見
付録・満州国の在来経済社会と戦争末期における統制方策……飯塚浩二

D 研究会

昭和36年度

第494回（10月6日）　アフリカをめぐって……飯塚浩二
第495回（10月13日）　「金瓶梅」の評価について……小野　忍
第496回（10月20日）　カースト制度について……山崎利男
第497回（10月27日）　社会人類学的分析について

——日本農村の場合——……中　根　千　枝

第498回（12月1日）　経済成長と所得配分の態様……川　野　重　任

第499回（12月8日）　人民公社の最近の動向……佐　藤　慎一郎

第500回（12月15日）　セイロン開発の実状と問題点……橋　本　秀　一

〔東洋文化研究所創立20周年記念講演会〕（11月27日）

「チベット問題」と農奴解放……仁井田　陞

人類学上からみた人間の疎外……石　田　英一郎

第501回（12月22日）　不敬罪復活運動と刑法……木　田　純　一

小　口　偉　一

昭　和　37　年

第502回（1月19日）　大正期の地方行政……大　島　美津子

第503回（1月26日）　インドの国家資本主義について……古　賀　正　則

第504回（2月2日）　日本地域構造……大　野　盛　雄

第505回（2月9日）　民衆宗教における反権力思想

——大本教を中心として——……村　上　重　良

第506回（2月16日）　近代日本哲学史における「近代の超克」…宮　川　透

第507回（2月23日）　日本における「空想的社会主義」運動と

その特徴……高　木　宏　夫

第508回（3月2日）　夏目漱石の問題(二)

——文学論と文学評論——……生　松　敬　三

第509回（3月9日）　ハーンとチェンバレン……築　島　謙　三

第510回（3月23日）　宗教の定義をめぐる諸問題……小　口　偉　一

第511回（4月27日）　イモ類栽培の文化と穀物栽培の文化……大　林　太　良

第512回（5月4日）　インド史蹟調査団第二次現地調査につい

て……山　本　達　郎

荒　松　雄

第513回（5月8日）　済州島の村落構造……泉　靖一
第514回（5月11日）　インド古代碑文研究現状と私の問題……山崎利男
第515回（5月25日）　帝国主義下のインド民族運動
——会議派と民族派——……中村平治
第516回（6月8日）　アフリカにおける教育文化事情……西野照太郎
イスラームとシチリア……飯塚浩二
〔京都大学人文科学研究所との講師交換研究会〕（6月12日）
東洋と西洋における農業技術農業社会……飯沼二郎
第517回（6月15日）　アラービー反乱（1881～2）の性格について
——帝国主義論のひとつの試みのために——……板垣雄三
第518回（6月22日）　中唐における仏教と道教
——宝蔵論成立の背景をめぐって——…鎌田茂雄
第519回（6月29日）　中国仏教の形成と中国固有思想……結城令聞
第520回（7月6日）　金元時代の道仏関係……窪　徳忠
第521回（9月14日）　黄仲畬（張彤雲）と黄恵廉
——アロー戦争期における対外交渉の非公式チャネル——……坂野正高
第522回（9月21日）　国際危機の理論的諸問題
——九・一八事件勃発をケースとして——……関　寛治
第523回（9月28日）　刀布考……関野　雄
第524回（10月5日）　中国奴婢制の一問題……西嶋定生
第525回（10月12日）　魏書の成立について……松本善海
第526回（10月19日）　殷代の国家構造について……松丸道雄

第527回（10月26日）　婚姻の機能と社会構造……中　根　千　枝
第528回（11月 2 日）　辛亥革命の時期の利権回収運動
——蘇抗甬鉄道借款運動を中心として——
……山　下　米　子
第529回（11月13日）　東アジア諸国の固有法と継承法……仁井田　陞
第530回（11月20日）　散文詩「野草」と魯迅……木　山　英　雄
第531回（12月 4 日）　「革命文学」と魯迅……丸　山　昇
第532回（12月 7 日）　人民公社を描いた作品……竹　内　実
第533回（12月14日）　セイロンの農業開発……橋　本　秀　一
第534回（12月21日）　農業就業構造の複合性……川　野　重　任

昭　和　38　年

第535回（1月18日）　明末織工の暴動について……佐　伯　有　一
第536回（1月25日）　人民公社論……古　島　和　雄
第537回（1月29日）　後進国における交易条件の低下と経済開
発……原　覚　天
第538回（2月 1 日）　中国と朝鮮の経済発展の比較
——その共通性と差異——……本　橋　渥
第539回（2月 5 日）　中国美術視察談……米　沢　嘉　圃
第540回（2月 8 日）　仁井田中国法史学批判序説……福　島　正　夫
第541回（2月15日）　マケティーアと鉄砲百人組……飯　塚　浩　二
第542回（2月22日）　大正期における東京市政の構造……大　島　美津子
第543回（3月 1 日）　現代日本人の宗教意識
——その歴史的背景と動態——……村　上　重　良
第544回（3月 8 日）　羽茂村の人たち……築　島　謙　三
第545回（3月22日）　信念体系の問題
——宗教集団の形態変化に関連して——小　口　偉　一

第546回（4月19日）　シンポジアム「新旧両大陸における文明起源の比較研究」Ⅰ……関野　雄
江上波夫
曽野寿彦
泉　靖一

第547回（4月23日）　インド・東南アジア調査報告……中根千枝

第548回（4月26日）　シンポジアム「新旧両大陸における文明起源の比較研究」Ⅱ……関野　雄
江上波夫
松丸道雄
寺田和夫

第549回（5月10日）　シュメール彫刻について……新　規矩男

第550回（5月14日）　「東洋文化」34号
——インド特集——合評会……中村平治
古賀正則
山崎利男
（司会）荒　松雄

第551回（5月21日）　イランのイスラーム建築について……石井　昭

第552回（5月28日）　イスラム文化とヨーロッパ文化……蒲生礼一

第553回（5月31日）　アラブ征服当時の中央アジアの社会……前嶋信次

〔京都大学人文科学研究所との講師交換研究会〕（6月4日）
中国科学史について……藪内　清

第554回（6月11日）　欧米におけるアジア研究学界の現状について……丸山真男

第555回（6月14日）　エジプト史における1930年代……板垣雄三

第556回（6月21日）　現代インドの政治過程

——総選挙と政党政治の展開——……中　村　平　治

第557回（6月25日）　唐代田制の研究

——中国学界からの批評を機会に——…仁井田　　陞

西　嶋　定　生

周　藤　吉　之

第558回（6月28日）　カウティルヤの政治論……山　崎　利　男

第559回（7月5日）　「デリー・サルタナット」と神秘主義派

——遺跡との関連において——……荒　　松　雄

第560回（7月9日）　飯塚浩二「東洋史と西洋史のあいだ」

合評会……嶋　田　襄　平

渡　辺　金　一

田　中　陽　児

木　村　尚三郎

第561回（9月13日）　仏名会について……野　田　幸三郎

第562回（9月20日）　北周廃仏と仏道二教……鎌　田　茂　雄

第563回（9月27日）　アジア貿易の現状と問題点……原　　覚　天

第564回（10月4日）　土地改革の経済効果……川　野　重　任

第565回（10月8日）　セイロンのドライ・ゾーン経済……橋　本　秀　一

第566回（10月11日）　清初の絵画……川　上　　涇

第567回（10月18日）　浙派の成立と展開……鈴　木　　敬

第568回（10月22日）　朝鮮・延辺の旅……安　藤　彦太郎

第569回（10月25日）　均田制の成立をめぐって……堀　　敏　一

第570回（11月1日）　築島謙三著「文化心理学基礎論」合評会

第571回（11月8日）　最近の中国における宋代史の研究……柳　田　節　子

第572回（11月15日）　清末の湖南……西　川　正　夫

第573回（11月29日）　チベット封建制の考察……中　根　千　枝

第574回（12月6日）　昭和2年京奉線遮断問題について……衛　藤　潘　吉
第575回（12月10日）　国際体系論とアジア研究……関　　寛　治
第576回（12月13日）　「民国」と李大釗の位置
——辛亥革命から五・四運動へ——……近　藤　邦　康
第577回（12月20日）　中国の創作歌劇……小　野　　忍

昭　和　39　年

第578回（1月10日）　朝鮮研究の現状
——個別研究とその思想的背景——……梶　村　秀　樹
第579回（1月14日）　最近の中国宗教事情……佐　木　秋　夫
第580回（1月17日）　人民公社をめぐる二，三の問題点……福　島　正　夫
本　橋　　渥
第581回（1月24日）　銭荘について……佐　伯　有　一
第582回（1月31日）　中国変革期における法と慣習……仁井田　　陞
第583回（2月4日）　ソ連農業雑感
——人民公社批判とも関連して——……丸　毛　　忍
第584回（2月7日）　古墳文化より見たる日本古代国家の形成…甘　粕　　健
第585回（2月7日）　日本文化の起源
——神話を中心として——……大　林　太　良
第586回（2月18日）　律令制成立の諸前提……井　上　光　貞
第587回（2月21日）　楽浪王氏の富……関　野　　雄
アイヌ文化と日本文化……泉　　靖　一
第588回（2月28日）　産業社会における布教組織の展開
——教団組織論その1——……井　門　富二夫
第589回（3月6日）　宗教集団の政治的活動……村　上　重　良
宗教と地域社会組織……小　口　偉　一
第590回（3月10日）　特別研究報告「研究35年の回顧」……仁井田　　陞

第591回（3月13日）　近代日本文化研究史論
——日本人の自己認識の足跡——……宮　川　　透
第592回（4月17日）　アジア諸国の経済成長——その類型——…川　野　重　任
第593回（4月24日）　イスラムの歴史叙述——特にアル・ジャバルティー（ボナパルト征服当時のクロニクル作者）をめぐって……三　木　　亘
第594回（5月1日）　アラブ諸国における「社会主義」——シリアの場合——バアス党を中心に——……林　　武
エジプトの場合——ムスリム同胞団とナセル政府を中心に——……板　垣　雄　三
第595回（5月8日）　インド史研究の最近の動向について㈠……荒　　松　雄
山　崎　利　男
第596回（5月12日）　イギリス・イタリーにおける東洋研究の現状——帰朝報告をかねて——……植　田　捷　雄
第597回（5月15日）　インド史研究の最近の動向について㈡……松　井　　透
中　村　平　治
第598回（5月29日）　インド・イスラームの八角墓をめぐって…山　本　達　郎
吉　川　逸　治
第599回（6月9日）　タイ国北西部の少数民族について……大　林　太　良
第600回（6月12日）　15世紀の東南アジア華僑……和　田　久　徳
第601回（6月19日）　王権から皇帝権へ……松　丸　道　雄
〈京都大学人文科学研究所との講師交換研究会〉（6月23日）
第602回（6月26日）　族刑をめぐる2,3の問題……小　倉　芳　彦
李悝の経済政策をめぐって……関　野　　雄
第603回（7月3日）　南宋の土地制度論——林勲の「本政書」について——……周　藤　吉　之

旧中国土地制度に関する問題若干……佐　伯　有　一

第604回（7月10日）　中国税役制度における戸等制について……柳　田　節　子

小　山　正　明

第605回（9月18日）　儀礼と信仰

1．仏名礼懺について……塩　入　良　道

2．御燈儀礼について……野　田　幸三郎

第606回（9月25日）　道教と仏教

1．老子化胡説の成立……窪　　徳　忠

2．老子化胡説の展開……鎌　田　茂　雄

第607回（9月26日）　1964年北京科学シンポジウムに参加して…小　口　偉　一

第608回（10月2日）　日本にある中国絵画……米　沢　嘉　圃

第609回（10月9日）　宋代の画院……鈴　木　　敬

北宋における文人画の成立……戸　田　禎　佑

第610回（10月23日）　中国近代小説の前駆――「金瓶梅」

について――……小　野　　忍

第611回（10月30日）　中国近代小説の前駆――「紅楼夢」

について――……木　山　英　雄

第612回（11月6日）　中ソ論争と中国国家法の理論……針　生　誠　吉

第613回（11月20日）　中国経済の社会主義経済への移行の

必然性について……常　盤　絢　子

第614回（12月1日）　抗日戦争期の政治過程……野　沢　　豊

辛亥革命の時期の民衆運動……山　下　米　子

第615回（12月4日）　「朝鮮における社会主義農村問題に

関するテーゼ」（金日成）について ……高　　昇　孝

梶　村　秀　樹

第616回（12月11日）　アヘン戦争以前における英国の実務

家的中国研究――マカートニー，ストーントン，
デーヴィス――……坂　野　正　高
第617回（12月18日）　最近の中国対外関係史研究……衛　藤　瀋　吉

昭　和　40　年

第618回（1月26日）　ソ連におけるアジア研究……林　　基
第619回（1月29日）　日本古代社会組織……泉　　靖　一
第620回（2月12日）　教団管理体制について……井　門　富二夫
第621回（2月19日）　日本農村におけるキリスト教の土着化……森　岡　清　美
第622回（2月26日）　神道イデオロギーの問題……小　口　偉　一
比較思想史の一問題……生　松　敬　三
第623回（3月5日）　イラン農村の社会経済構造――実態
調査報告――……大　野　盛　雄
第624回（3月12日）　テル・サラサートの発掘……曽　野　寿　彦
松　谷　敏　雄
第625回（3月19日）　特別研究会　竹島をめぐる日韓紛争……植　田　捷　雄
第626回（4月16日）　台湾経済の分析……川　野　重　任
第627回（4月23日）　アジア諸国経済発展における援助問題……原　　覚　天
韓国の経済……梶　田　　勝
第628回（4月27日）　南ベトナム問題について――その歴
史的考察――……山　本　達　郎
第629回（4月30日）　イラン立憲革命の諸問題……加賀谷　　寛
ヨーロッパの危機……飯　塚　浩　二
第630回（5月7日）　ウィリアム・ジョーンズとヘンリー・
コールブルーク――イギリス植民地下のヒンド
ゥー法の形成――……山　崎　利　男
第631回（5月11日）　南ベトナム解放民族戦線について……蠟　山　芳　郎

第632回（5月14日）　19世紀後半のアウドのタルクダーリ
ー制——植民地支配下の土地制度——……榎本暢子
第633回（5月28日）　中央アンデスにおける形成期文化
——コトシュ遺跡を中心として——……泉靖一・大貫良夫
第634回（6月1日）　中国史の方法論……トウィチエット
第635回（6月11日）　文明起源の比較研究における問題点……江上波夫・泉靖一
第636回（6月18日）　デリー諸王朝の遺跡の編年の問題に
ついて……山本達郎・月輪時房
〈京都大学人文科学研究所との交換研究会〉（6月25日）
第637回（7月2日）　マレーシアにおける国民統合の問題……築島謙三
第638回（7月13日）　セイロンの国民所得と産業連関……橋本秀一
第639回（7月16日）　ベトナム問題をめぐる比較危機論的
一考察……関寛治
第640回（7月19日）　華夷思想の形成……小倉芳彦
中国古代における色賤制度……堀敏一
第641回（9月24日）　殷代王室世系上の一・二の問題……松丸道雄
刀銭考補正……関野雄
第642回（10月12日）　中国における農村マーケットの問題……佐伯有一
第643回（10月15日）　チベット富農の実態について……中根千枝
第644回（10月22日）　禅宗の成立……鎌田茂雄
中国仏教における空観の展開……泰本融
第645回（10月29日）　中国仏教における地獄観……塩入良道
全真教の成立……窪徳忠
第646回（11月2日）　南朝鮮の経済状況……中川信夫
第647回（11月5日）　中国古代説話画における場面表現の方式
——インド古代の場合と比較して——……米沢嘉圃

第648回（11月 9 日）　日韓条約における文化財問題……旗　田　巍
第649回（11月12日）　元代絵画における北宋様式……鈴　木　敬
第650回（11月19日）　明代短編小説のテーマと長編小説……尾　上　兼　英
第651回（12月 3 日）　明末清初詩一瞥……山之内　正　彦
第652回（12月10日）　譚嗣同と李大釗——「衝決網羅」を中心に——……近　藤　邦　康
第653回（12月14日）　民族資本，官僚資本，買弁資本……古　島　和　雄
第654回（12月17日）　インドシナ半島の葬制……大　林　太　良
アメリカベトナム反戦運動のイメージと現実……関　寛　治

昭　和　41　年

第665回（1月14日）　中国における社会主義企業の革命化——下放の問題——……本　橋　渥
第656回（1月21日）　朝鮮の郡協同農場経営委員会について……梶　村　秀　樹
第657回（1月28日）　中国における民主と自由……針　生　誠　吉
第658回（2月 4 日）過渡期と人民公社——共産主義への移行過程での農村・農民問題——……福　島　裕
人民公社生産隊の会計報告……福　島　正　夫
第659回（2月11日）　中国を英国の外交官はどうみていたか——マカートニー使節団の派遣から辛亥革命まで——坂　野　正　高
第660回（2月18日）　済州島調査報告……泉　靖　一
第661回（3月 4 日）　高度経済成長と就業構造の変化……飯　塚　浩　二
第662回（3月11日）　祭りと地域社会——秩父神社冬祭り調査報告——……柳　川　啓　一
第663回（3月18日）　政治権力と集落神社——三重県における神社合祀の過程——……森　岡　清　美
第664回（4月14日）　三孔布の正体をめぐって

——秦の統一前夜の貨幣経済——……関　野　　雄

均田制と租佃制——とくに均田制の崩壊と関連して——堀　　敏　一

第665回（4月21日）　明末江南の水利事業——所謂「佃戸の自立化」と関連して——……浜　島　敦　俊

第666回（4月28日）　ミツチェル報告書をめぐって……田　中　正　俊

第667回（5月12日）　共通課題——中国における仏教思想の受容過程

1. 廬山慧遠の法身観……塩　入　良　道

2. 浄影寺慧遠の仏性思想……鎌　田　茂　雄

3. 吉蔵の批判的精神……泰　本　　融

第668回（5月19日）　日本における中国宗教の受容過程……野　田　幸三郎

六夜待と庚申待……窪　　徳　忠

第669回（5月26日）マレー人は怠惰であるということについて…築　島　謙　三

第670回（5月31日）　15世紀のパレンバン華僑……和　田　久　徳

第671回（6月2日）　スカルノ体制の基本問題……岸　　幸　一

第672回（6月9日）　毛沢東の思想——その形成過程の一考察——……野　村　浩　一

第673回（6月14日）　フィリピンの農村……高　橋　　彰

第674回（6月16日）　〝第3種人〟をめぐる論争——補遺——…竹　内　　実

〈京都大学人文科学研究所との交換研究会〉（6月21日）

第675回（6月23日）　中国革命について——1940年代後半をめぐって——……加　藤　祐　三

第676回（6月28日）　「東洋文化」40号41号合評会

第677回（6月30日）　中国近現代史の方法論……佐　伯　有　一

史学史のあつかい方について——中国の近現代史研究を中心に——……石　田　米　子

第678回（7月7日）　中国旅行より帰りて……米沢嘉圃
関野雄
鈴木敬

第679回（9月22日）　中国に自由はあるか——基本的人権の比較憲法——……針生誠吉

第680回（9月29日）　同治年間の条約論議……坂野正高
中国における社会主義経済の特質……常盤絢子

京都大学人文科学研究所との交換研究会

37年6月12日　東洋と西洋における農業技術・農業社会……飯沼二郎

38年6月4日　中国科学史について……藪内清

39年6月23日　ブルジョア革命の国際関係……樋口謹一

40年6月25日　パキスタン，アフガニスタンにおける考古学的調査の成果……水野清一

41年6月21日　近代芸術のメディア……多田道太郎

機関研究および特定研究

昭和36～40年度

現代アジア・アフリカ地域における社会・経済の発展と文化の変容……飯塚浩二

総合研究

昭和36年度

オリエント文明と東亜文明との交流の研究……江上波夫
——考古・美術資料を中心として——

デリー諸王朝の建造物の研究……山本達郎

社会主義諸国における司法・調停制度に関する比較研究……福島正夫

昭和37年度

オリエント文明と東亜文明との交流の研究……江上波夫
——考古・美術資料を中心として——

デリー諸王朝時代の建造物の研究……山本達郎

社会主義諸国における司法・調停制度に関する比較研究……福島正夫

昭和38年度

オリエント文明と東亜文明との交流の研究……江上波夫
——考古・美術資料を中心として——

新旧両大陸における文明起源の比較研究……関野雄

デリー諸王朝時代の建造物の研究……山本達郎

昭和40年度

社会主義諸国における市民の権利と自由に関する比較法的研究…福島正夫

宗教集団の構造変化に関する調査研究……小口偉一

アンデス地帯における形成期文化の研究……泉靖一

昭和41年度

社会主義諸国における市民の権利と自由に関する比較法的研究…福島正夫

デリー諸王朝時代の建造物の研究……荒松雄

日本絵画に及ぼせる宋元画の影響について……鈴木敬

宗教集団の構造変化に関する調査研究……小口偉一

沖縄文化と大陸文化との交流に関する調査研究……窪　徳　忠

各　個　研　究

昭　和　37　年　度

離島における庚申信仰の調査と研究……窪　徳　忠

明律の註釈書と明代の判決集との総合的研究……仁井田　陞

昭　和　38　年　度

明律および判決集の総合的研究……仁井田　陞

離島における庚申信仰……窪　徳　忠

古墳時代東国の地域性に関する研究……甘　粕　健

昭　和　39　年　度

中国南北朝仏教思想史の研究……鎌　田　茂　雄

日本における未刊甲骨卜辞の蒐集……松　丸　道　雄

昭　和　40　年　度

中国南北朝仏教思想史の研究……鎌　田　茂　雄

昭　和　41　年　度

隋代仏教思想史研究……鎌　田　茂　雄

Ⅶ　東洋文献センター

昭和41年4月，本研究所に，附属施設として，東洋学文献センターが置かれた。本センターは，とくに旧中国の政治・法律および文学・演劇関係の図書，戦後中国

および朝鮮の刊行物を蒐集し，所蔵資料図書の目録を整備するなどして，広く研究者の利用に資することをめざしている。

Ⅷ 調査研究事業

A イラク・イラン調査研究

イラク・イラン遺跡調査団は，1964年に第4次調査，次いで1965—66年に第5次調査をイラク，イラン両国において行なった。

第4次調査では，イラクのテル・サラサート第2号丘，イランのデーラマン地方のガレチティ，ハッサニ・マハレ両遺跡の発掘調査をした。テル・サラサート第2号丘の発掘は第1次調査（1956—57）に続いて2度目であり，下層を掘り下げ，ついに地山直上の最下層まで調査することができた。その結果，第2号丘は紀元前6,000年頃から紀元前3,000年ぐらいの間に形成されたものであることが判明した。

この遺跡で最初に人が住んだのは，新石器ハッスーナ期であった。最初人々は竪穴をつくり，そこに住んだが，次の段階になると地上に建物をたてて住むようになった。同じ型式の土器をつくりながらこのように居住様式が変化した事実は興味をそそることであって，建物の起源についておおよその見当をつけることができる。この時期の人々がテル・サラサートを放棄してから1,000年以上人も住まないままにされたが，紀元前4,000年頃に別の人々がやってきて住みついた。それがウバイド期の人々であった。彼らはすでにかなり高い文化水準に達しており，日乾レンガでしっかりした家を建て，村落のまわりに溝を掘った。部落の中は比較的よく区画整理されていたものとみえ，土器焼きカマが密集して存在する所はかなり長い間仕

事場として使用されていたらしい。第2号丘ではウバイド期の堆積が最も厚く，古いものから新しいものまで連続的にそろっていたので，発達のありさまをくわしくあとづけることができた。次のウルク期への変化は漸進的なものであったらしいので，人々は徐々に進歩したものと思われるが，文化的には質のちがったものになっている。つまり，この時期になって，テル・サラサートではじめて神殿がつくられるまでになったからである。

このように，テル・サラサート第2号丘の発掘は，予想通り「文明の起源とその初期の発展の様相」という問題解決に寄与する目的を十分にはたし，大きな手がかりを提供した。

イラン，デーラマン地方の古墳群の発掘は第3次調査（1960）に引きつづき2度目である。第4次調査ではガレクティ第1号丘で10基，第2号丘で27基，ハッサン・マハレで8基，計25基の古墳を発掘した。ガレクティ遺跡の古墳は時期的にいって，2種類ある。古い方は，紀元前1000年頃と考えられる青銅器時代末期ないし鉄器時代期につくられたもので，石槨墓と土拡墓がある。新しい方は，いわゆるパルティア・ササン朝時代につくられたもので，地下式横穴墓，土拡墓，甕棺墓がある。これら2種の古墳は葬法，副葬品も異なり，そのちがいははっきりしている。一方，ハッサニ・マハレ遺跡の古墳はすべてガレティ遺跡の新しい時期のものに対応する。

これら2種類の古墳の時間的，空間的なひろがりについては，いままで十分にわかっているとはいえなかった。しかし，多くの出土品を得ることができたので，年代についてもより正確な時期を推定することができ，また当時の文化的なつながりに関してもより明確に位置づけることが可能になった。その成果は現在準備中の報告書によって明らかにされよう。

第5次調査ではイラン，ササン朝時代の記念物タク・イ・ブスタンの調査，タル・ムシュキ遺跡とテル・サラサート遺跡第1号丘，第5号丘の発掘を行なった。

タク・イ・ブスタンは有名な遺跡ではあるが，厳密な意味で科学的な調査をし

たのは今回がはじめてである。今回は長期にわたる調査計画の第一歩として，周辺の地形測量と洞穴の実測を行ない，さらにステレオ・カメラＭＳＫ 120 を用いて写真実測を試みた。短期の調査ではあったが，数々の新事実を発見することができ，今後の東西文化交流研究に大きな期待がかけられる。

タル・イ・ムシュキ遺跡のあるマルヴ・ダシュト平原には数多の先史遺跡があり，不明の所が多いイラン高原で農耕の発明から文明の発生までの過程を明らかにしていくには最も適切な場所である。第１次調査以来すでにタル・イ・バクーン，タル・イ・ジヤリＡ，Ｂ，タル・イ・ギャブ等の発掘をしてきたが，今回マルヴ・ダシュト先史遺跡の中でも最も古い時期のものに属すると思われるタル・イ・ムシュキの発掘を行なった。

この遺跡は，中石器的な幾何学形細石器と土器とを併存しており，建物の建築材としてもまだ日乾レンガの発明がなされず，練土を用いている点で興味をひく。イラン高原でこの時期の調査が進んでいないために，十分な比定を行うことができないが，シアルクＩ期あるいはそれより古い時期ではないかと想像される。出土品のなかで重要なものは数点の銅製品と石器を植刃して鎌をつくる骨製の柄であろう。銅製品はシアルクＩ期からも出土しているが，近年西アジア各地で非常に古い時代から銅製品が用いられた証拠が発見されていて，近いうちに銅の使用の起源について考えなおさねばならないようになるものと思われる。

テル・サラサート遺跡ではすでに第２号丘の発掘が終っているので，最大の第１号丘と最小の第５号丘の発掘を開始した。第５号丘では，大きな倉庫と円形のカマがみつかった。倉庫は 18m×6.5m の長方形を呈し，湿気よけのためにほぼ 70cm おきに「ねだ」を入れてあった。このようにねだを入れてつくる倉庫は西アジアでははじめてみつかったが，インダス文明のハラッパーでもつくられていたことがわかっている。火災を受けていたため多量の麦粒がみつかり，穀物倉であることがわかった。円形のカマは土器を焼くためのものと思われ，カマの両側に一個ずつ高さ１ｍにおよぶ大きな壺が床に埋められていた。これは粘土を漉すためのものらしく，

底に孔があけられていた。これらの遺構は，北メソポタミアでニネヴェ5期といわれる時期のものであるが，この時代につくられた良質の灰色土器の粘土を得る装置がこの壺であったと思われる。この時期は，南メソポタミアでは初期王朝時代の前段階であるジェムデド・ナスル期に対応するといわれていたが，北メソポタミアにおいても国家の出現を経済的に裏づけるような大きい穀物倉がつくられていたことはきわめて重要な意味をもつ。

1号丘の最頂部には奇妙な遺構があった。それは，1.5×3mぐらいの広さで高さ約1.5mほどの天井をアーチで築いた小部屋群であった。部屋の中からは何も出土しない。部屋の外には敷石があり，石の表面は光っている。そこで考えられたのが，この特殊な遺構が「まいり墓」ではないかという想像であるが，その確証を得なこいまま調査を終えた。遺構のまわりで出土する土器からこの遺構のつくられた時期を推定すると紀元前1,600年頃のものと思われる。しかもその土器はフルリ人に特有なものである。アマルナ時代オリエントの強国であったフルリ・ミタンニののこした遺構であるとすれば，「まいり墓」をつくり，別の所に本当の墓をつくることは十分考えられるので，今後の調査によって立派な王墓の発見される期待は大きい。もしみつかれば，まだはっきりしていないフルリ・ミタンニの文化について重要な手がかりを提供するこものと思われる。

「人類文明の起源とその初期の発展の研究」と「東亜および日本古代文明の源流としての古代イラン文明の研究」という二大目的を追求するイラク・イラン遺跡調査団は，それぞれの分野において上記のような成果をおさめ，すでに7冊の報告書を出版したが，現在のこりの調査報告書を準備中である。

B　中世インド＝イスラーム建造物の調査研究

東京大学インド史蹟調査団は，13世紀から16世紀にかけてのインドにおけるイスラーム系建造物に関する調査研究を目的とし，昭和34年10月から約5ケ月にわたって調査をおこない，さらに同36年11月から約4ケ月にわたって補足調査を実施した。

調査団は，山本達郎併任教授(団長)・荒　松雄助教授・月輪時房助手・三枝朝四郎研究委嘱・大島太市研究委嘱の5名で構成されている。

調査の対象は，いわゆるデリー諸王朝時代に属する，デリー地域に現存する遺蹟が中心であるが，とくに墓建築・モスク・水利施設などの建造物に重点がおかれ，あわせて，その他のさまざまな建造物をも対象としとり上げている。また，これらの諸遺蹟とほぼ同時代に属する，インド各地に散在している建造物についても，簡単な調査研究をおこなったきた。たとえば，ジョウンプル・ゴール・パーンドゥア・マーンドゥー・ゴールコンダ・ビーダル・グルバルガー・ビジャープル・アフマドナガルおよびアフマダーバードなどの諸地域に現存している建造物がそれである。

調査団は，現地においては，遺蹟の探査とその現状の把握，遺蹟の状態の観察と記録，写真撮影，地上立体写真撮影による測量方法をもふくむ各種の測量作業，および拓本の採取などをおこない，また，この研究に関連する文献の蒐集や複写などをもおこなった。それらの諸資料は，現在，分類保存され，研究と報告書出版に利用されているが，将来は，ひろく一般にも利用してもらうはずである。

本研究は，上に述べた建造物に関して，歴史学・考古学・建築史学その他さまざまな視点からするものであるが，その研究報告は，第1冊は昭和41年度に出版されることとなった。この最初の報告書は，デリー地域に現存する約480の建造物を，総合的な視点から分類整理して，網羅的に紹介するもので，つづいて刊行される予定の墓・モスク・水利施設その他の分冊の，いわば総目録を提供するものである。

IX 研究課題

昭和37年度

A 共同研究

Ⅰ ユーラシアの民族と文化　班主任　江上

1 日本国家の成立における大陸的要素……江上波夫

2 アイヌ文化の起源……大林太良

3 東アジアにおける社会構造の比較研究……中根千枝

4 朝鮮の社会構造……泉　靖一

5 古墳文化より見たる日本古代国家の形成……甘粕　健

Ⅱ 南アジアにおける社会と文化の変遷　班主任　山本

1 インドシナにおける国家権力の構造と村落……山本達郎

2 インドネシアにおける文化の諸潮流……大林太良

3 インドにおける支配構造と社会関係（12世紀以前）……山崎利男

4 インドにおける支配構造と社会関係（13世紀以後）……荒　松雄

5 13～15世紀のインド文化の変動……山本達郎

6 近代ヒンドゥー法の形成……山崎利男

7 近代インド政治思想の史的展開……中村平治

8 独立インドの政治過程……中村平治

9 独立インドの経済過程……古賀正則

10 インド農民運動と土地改革……古賀正則

Ⅲ 西アジア研究　班主任　飯塚

1 ササン朝美術の特質……深井晋司

2 西アジアにおける近代思想運動……加賀谷　寛

3 アラブ民族主義の歴史的展開……板垣雄三

4 アフリカの民族主義……西野照太郎

5 イスラームとアフリカ……飯塚浩二

6 バハイズムの展開過程……小口偉一

Ⅳ 中国における仏教と道教　班主任　結城

1　唯識と華厳の交渉……結　城　令　聞
2　全真教団と仏教……窪　　徳　忠
3　唐代貴族の宗教生活……野　田　幸三郎
4　中国仏教における懺法の形成と展開……塩　入　良　道
5　澄観・宗密の思想……鎌　田　茂　雄
6　中国の仏教における空観系統の研究……泰　本　　融

Ⅴ　近代中国の国際関係　　班主任　植　田

1　英国外交官の中国観……坂　野　正　高
2　幣原外交……衛　藤　瀋　吉
3　満州事変直前の日中関係……関　　寛　治
4　中共の国際関係……植　田　捷　雄

Ⅵ　中国における政治機構と土地所有の史的研究　　班主任　仁井田

1　出土文字史料を主として見た殷代の国家構造……松　丸　道　雄
2　先秦諸国の経済機構……関　野　　雄
3　皇帝制度の成立……西　嶋　定　生
4　唐代の坊里制と隣保制……松　本　善　海
5　均田制的政治体制とその崩壊……堀　　敏　一
6　五代および宋代の国制……西　川　正　夫
7　宋代郷村の土地制度……周　藤　吉　之
8　宋代の税役制度……柳　田　節　子
9　明代における地主的土地所有と村落体制の変遷……佐　伯　有　一
10　中国の法慣習と法律格言……仁井田　　陞
11　清末民国初年の中国における社会関係の変動……山　下　米　子
12　チベットの社会組織と土地制度……中　根　千　枝

Ⅶ　近代中国の思想と文学　　班主任　小　野

1　魯迅……丸　山　　昇

2　厳復と林紓……小　野　　忍
3　近代文学と義理人情……仁井田　　陞
4　五四運動期の思想……野　村　浩　一
5　近代民話……竹　内　　実
6　清末民初の思想史的考察……近　藤　邦　康
7　「語絲」の人々……木　山　英　雄
8　五四時代の文学……新　島　淳　良

Ⅷ　現代中国の研究　　班主任　福　島

1　現代中国刑事法の研究……仁井田　　陞
2　人民公社と所有制……福　島　正　夫
3　復興期における経済統制政策……古　島　和　雄
4　人民公社と農村工業化……本　橋　　渥
5　李立三グループと留蘇グループの抬頭……衛　藤　瀋　吉
6　第一次国内革命戦争時代の労農運動……佐　伯　有　一
7　現代中国文学の特質……小　野　　忍
8　農業協同化と文学……竹　内　　実
9　現代中国教育史……新　島　淳　良

Ⅸ　アジア経済秩序と発展の構造　　班主任　川　野

1　東南アジア米穀経済の構造変動……川　野　重　任
2　経済開発のアジア的特性……橋　本　秀　一
3　開発計画の比較研究……原　　覚　天

Ⅹ　近代日本の社会……班主任　飯　塚

1　東京の歴史的発展……大　島　美津子
2　愛知県における工業と農業の交錯……花　村　芳　樹
3　日本漁業の経済的・地理的研究……飯　塚　浩　二
　　大　野　盛　雄

4　農業の生産構造……川　野　重　任

Ⅺ　近代日本の思想と宗教　　班主任　小　口

1　日本思想史における近代化と伝統……宮　川　　透

2　近代文学と日本人の精神構造……生　松　敬　三

3　日本における空想的社会主義運動とその特徴……高　木　宏　夫

4　現代宗教における政治批判と平和主義……村　上　重　良

5　地域社会組織と宗教……小　口　偉　一

6　村の体制と意識……築　島　謙　三

B　個　別　研　究

1　宋代絵画史研究……米　沢　嘉　圃

2　道教の日本朝鮮への伝播……窪　　徳　忠

3　外国人の日本……築　島　謙　三

4　文明と文化に関する考察……築　島　謙　三

昭和38年度

※印　研究員

Ⅰ　新旧両大陸における文明起源の比較研究　　班主任　関野

1　江　上　波　夫　　家畜の起源を中心として

2※池　田　次　郎　　人類学的研究を中心として

3　泉　　靖　一　　穀類農耕の発生を中心として

4　関　野　　雄　　農耕技術を中心として

5※糸　賀　昌　昭　　水利の問題を中心として

6※寺　田　和　夫　　土器の発生を中心として

7※曽　野　寿　彦　　村落より都市への発展を中心として

8　松　丸　道　雄　　国家の形成を中心として

9 ※大　林　太　良　　文明発生における神話の機能を中心として

Ⅱ　オリエント文明と東亜文明との交流

——考古・美術資料を中心として——　　班主任　江上

1 江　上　波　夫
※増　田　精　一　オリエントの青銅器文化と東亜の青銅器文化との関係

2 ※新　　規矩男　　古代オリエントにおける彫刻の諸問題

3　深　井　晋　司　　ササン朝美術の特質とその極東への波及

4 ※堀　内　清　治　　古代西アジアにおける神殿の研究

5 ※石　井　　昭　　イランにおけるイスラーム建築の研究

6 ※三　宅　俊　成　　中国とオリエントにおける彩文土器の比較研究

Ⅲ　西アジア研究　　班主任　飯塚

1　飯　塚　浩　二　　イスラームとアフリカ

2　小　口　偉　一　　バハイズムの展開過程

3　板　垣　雄　三　　アラブ民族主義の歴史的展開

4 ※西　野　照太郎　　アフリカの民族主義

5 ※加賀谷　　寛　　西アジアにおける近代思想運動

Ⅳ　インドにおける支配体制と社会構造の史的研究　　班主任　荒

1　山　崎　利　男　　インド古代の支配体制と社会構造

2　荒　　松　雄　　ムスリム支配体制とインド社会

3 ※松　井　　透　　イギリス植民地支配下のインド社会

4 ※中　村　平　治　　インドにおける帝国主義支配の成立

5　古　賀　正　則　　現代インドにおける農民運動の発展

6　山　崎　利　男　　現代インドにおけるヒンドゥー法の展開

7　中　根　千　枝　　現代インドにおける村落の社会構造

8 ※中　村　平　治　　両大戦間におけるインドの政治過程

9　古　賀　正　則　　独立後のインドにおける国家資本主義の発展

10　山　本　達　郎　　インドシナにおける村落社会の近代化（比較研究）

Ⅴ　デリー諸王朝時代の建造物の研究　　班主任　山本

1　山本達郎・月輪時房　墓およびモスクの構造と様式の変遷

2　山本達郎・月輪時房　建造物に残存する文様に関する研究

3　荒　松　雄　碑文・文献・伝承からみた首都デリーの変遷とその遺跡

4　山　本　達　郎　建造物よりみたインドおよびイスラーム文化の交流と変容

5　月　輪　時　房　ヒンドゥー・イスラーム建築技術の交流と展開

6　荒　松　雄　遺跡・建造物を資料とする政治・宗教・社会の諸問題

Ⅵ　アジア経済秩序と発展の構造　　班主任　川野

1　川　野　重　任　東南アジア経済の成長の分析

2　橋　本　秀　一　経済開発のアジア的特性

3※原　覚　天　開発計画の比較研究

Ⅶ　中国における仏教と道教　　班主任　窪

1※塩　入　良　道　天台思想の形式

2※泰　本　融　中観思想の中国的変容

3※野　田　幸三郎　唐代貴族の宗教生活

4　鎌　田　茂　雄　唐代における仏教と道教
——北山録を中心として——

5　窪　徳　忠　元代の仏道関係
——弁偽録を中心として——

Ⅷ　中国絵画の伝統と創造　　班主任　米沢

1　米　沢　嘉　圃　古代および清代以後

2※戸　田　禎　佑　宋代

3※川　上　涇　元代

4 ※鈴　木　　敬　　明代

Ⅸ　中国における政治機構と土地所有の史的研究　　班主任　仁井田

1　松　丸　道　雄　　殷周時代の国家構造

2　関　野　　雄　　先秦諸国の経済機構

3　西　嶋　定　生　　皇帝制度の成立

4　松　本　善　海　　唐代の坊里制と隣保制

5 ※堀　　敏　一　　中国古代末期の国家権力と土地制度

6 ※周　藤　吉　之　　宋代の郷村制の変革過程

7 ※柳　田　節　子　　宋代江南デルタ地帯の土地所有制

8　佐　伯　有　一　　明清時代農村の構造

9　西　川　正　夫　　中国の同族——湖南を中心として——

10　山　下　米　子　　清末民国初年の中国における農民運動

11　仁井田　　陞　　中国農村慣習と法格言

12　中　根　千　枝　　チベットの社会組織と土地制度

Ⅹ　中国の国際関係　　班主任　植田

1　植　田　捷　雄　　東アジアにおける領土問題

2 ※坂　野　正　高　　英国外交官の中国観

3 ※衛　藤　瀋　吉　　田中内閣と中国問題

4　関　　寛　治　　国際危機の分析

——中ソ論争とキューバ危機——

Ⅺ　近代中国の思想と文学　　班主任　小野

1 ※丸　山　　昇　　魯迅

2　小　野　　忍　　厳復と林紓

3 ※野　村　浩　一　　五四運動期の思想

4 ※竹　内　　実　　近代民話

5　近　藤　邦　康　　清末民初の思想史的考察

6　木　山　英　雄　　「語絲」の人々

7※新　島　淳　良　　抗争戦争期の辺区における文学

Ⅻ　現代中国の研究　　班主任　福島

1　福　島　正　夫　　現代中国法の理論と特質

2　福　島　正　夫　　公社所有制再論

——最初の展開と関連して——

3　仁井田　　陞　　中国新刑事法制の発展

4※古　島　和　雄　　官僚資本の形成とその構造

5※本　橋　　渥　　中国の工業化政策としての農業基礎論

6　佐　伯　有　一　　1920年代の中国労農運動

7※竹　内　　実　　人民公社と文学

8※新　島　淳　良　　整風運動

9　梶　村　秀　樹　　朝鮮現代経済政策史

ⅩⅢ　東アジア史における日本文化の形成過程　　班主任　江上

1　江　上　波　夫　　東亜史上より見たる古代日本

2　関　野　　雄　　楽浪文化の経済的基礎

3　西　嶋　定　生　　古代東アジアにおける国際的政治機構

4　仁井田　　陞　　律令法とその周辺諸国法への影響

5※石母田　　正　　日本古代国家の形成と朝鮮問題

6※井　上　光　貞　　日本における律令法の受容過程

7　甘　粕　　健　　古墳文化より見たる日本古代国家の形成

8※大　林　太　良　　民族学から見たる日本文化の起源

9　泉　　靖　一　　アイヌ文化と日本文化

ⅩⅣ　近代日本の社会と思想　　班主任　小口

1　飯　塚　浩　二
　※大　野　盛　雄　　日本漁業の経済的・地理的研究

2 ※花　村　芳　樹　　愛知県における工業と農業の交錯
——農地転用の地域的分析を中心に——

3 ※大　島　美津子　　大正期の地方行政

4 ※宮　川　　透　　日本思想史における近代化と伝統

5 ※村　上　重　良　　現代宗教における政治批判と平和主義

6 ※井　門　冨二夫　　宗教集団と信者層

7　小　口　偉　一　　宗教と地域社会

8　築　島　謙　三　　村の体制と意識

昭和39年度共同研究課題

※印　研究委嘱

Ⅰ　アジア経済秩序と発展の構造　　班主任　川野

1　川　野　重　任　　アジア経済成長の類型分析

2　橋　本　秀　一　　セイロンの国内入植

3 ※原　　覚　天　　アジア開発計画の比較研究

Ⅱ　オリエント文明と東亜文明との交流
——考古・美術資料を中心として——　　班主任　江上

1 江　上　波　夫 ／ ※増　田　精　一　　オリエントの青銅文化と東亜の青銅器文化との関係

2 ※新　　規矩男　　古代オリエントにおける彫刻の諸問題

3　深　井　晋　司　　ササン朝美術の特質とその極東への波及

4 ※堀　内　清　治　　古代西アジアにおける神殿の研究

5 ※石　井　　昭　　イランにおけるイスラーム建築の研究

6 ※三　宅　俊　成　　中国とオリエントにおける彩文土器の比較研究

Ⅲ　西アジア研究　　班主任　飯塚

1　飯　塚　浩　二　　イスラームとアフリカ

2 ※三　木　　亘　　エジプトにおける近代化の諸問題
——ムハンマド・アリーの時代——

3　小　口　偉　一　　バハイズムの展開過程

4 ※加賀谷　　寛　　西アジアにおける近代思想運動

5　板　垣　雄　三　　アラブ民族主義の歴史的展開

6 ※林　　武　　西アジアにおける社会変動——都市化と工業化——

Ⅳ　インドにおける支配体制と社会構造　　班主任　荒

1　山　崎　利　男　　インド古代の支配体制と社会構造

2　荒　　松　雄　　ムスリム支配体制とインド社会

3 ※松　井　　透　　イギリス植民地支配下のインド社会

4 ※中　村　平　治　　独立後のインドにおける政治過程

5 ※古　賀　正　則　　独立後のインドにおける国家資本主義

6　中　根　千　枝　　現代インドにおける家族構造と血縁・婚姻組織

7　山　崎　利　男　　現代インドにおけるヒンドゥー法の展開

Ⅴ　デリー諸王朝時代の建造物の研究　　班主任　山本

1　山本達郎・月輪時房　　墓およびモスクの構造と様式の変遷

2　荒　　松　雄　　碑文・文献・伝承からみた首都デリーの変遷とその遺跡

3　山　本　達　郎　　建造物よりみたインドおよびイスラーム文化の交流と変容

4　月　輪　時　房　　ヒンドゥー・イスラーム建築技術の交流と展開

Ⅵ　東南アジア研究　　班主任　橋本

1　山　本　達　郎　　ヴェトナムの村落と土地制度

2　築　島　謙　三　　マライ人村落の自治体制

3 ※和　田　久　徳　　東南アジアの華僑社会の変遷

4 ※大　林　太　良　　タイ国少数の民族学的研究

5 ※関　　寛　治　　タイ国の政治過程

Ⅶ　東北アジア研究

Ⅷ　中国古代の政治機構　　班主任　関野

1　松　丸　道　雄　　殷周時代の国家構造

2　関　野　　雄　　先秦諸国の経済機構

3※小　倉　芳　彦　　戦国秦漢期の政治思想

4　西　嶋　定　生　　皇帝制度の成立

5　松　本　善　海　　唐代の坊里制と隣保制

6※堀　　敏　一　　中国古代末期の支配体制

Ⅸ　中国における土地所有の史的研究　　班主任　佐伯

1※周　藤　吉　之　　宋代郷村制の変革過程

2※柳　田　節　子　　宋代江南デルタ地帯の土地所有制

3※小　山　正　明　　明代税役制と農村の変化

4※田　中　正　俊　　明清時代における農村の階級構成

5　佐　伯　有　一　　中国革命前夜農村における土地関係

6　中　根　千　枝　　チベットの社会組織と土地制度

Ⅹ　中国における仏教と道教　　班主任　窪

1※泰　本　　融　　仏教における法（ダルマ）観念の中国的展開

2　鎌　田　茂　雄　　南北朝時代の仏道関係——二教論を中心として——

3　窪　　徳　忠　　元代の仏道関係——弁偽録について——

4 ※野　田　幸三郎 ※塩　入　良　道　　仏教儀礼の研究

Ⅺ　中国絵画の伝統と創造　　班主任　米沢

1※鈴　木　　敬　　宋代画院と院体画

2 米　沢　嘉　圃 ※川　上　　涇　　元代文人画の二潮流

3※戸　田　禎　佑　　墨画の系譜

Ⅻ　近代中国の思想と文学　　班主任　小野

1 ※丸　山　　昇　　魯迅
2　小　野　　忍　　厳復と林紓
3 ※野　村　浩　一　　五四運動期の思想
4 ※竹　内　　実　　近代民話
5　近　藤　邦　康　　清末民初の思想史的考察
6　木　山　英　雄　　「語絲」の人々
7 ※新　島　淳　良　　抗日戦争期の辺区における文学

XIII　近現代中国および朝鮮における変革構造の研究　　班主任　福島

A　法と国家

1　福　島　正　夫　　現代中国法の理論と特質
2　福　島　正　夫　　人民公社所有制論
3 ※針　生　誠　吉　　現代中国法と国家構造の変化

B　経済構造

1 ※本　橋　　渥　　中国の国民経済発展における人民公社の経済的機能
2 ※福　島　　裕　　中国における計画経済と工業化政策
3 ※常　盤　絢　子　　社会主義再生産論と中国における農業基礎論

C　変革の史的分析

1　山　下　米　子　　清末民国初年の農民運動
2　佐　伯　有　一　　労農運動と中国大革命
3 ※野　沢　　豊　　抗日戦争期の政治過程
4 ※古　島　和　雄　　中国官僚資本の形成とその構造
5　梶　村　秀　樹　　朝鮮現代経済政策史

XIV　中国の国際関係　　班主任　植田

1　植　田　捷　雄　　中国の国境問題
2 ※坂　野　正　高　　英国外交官の中国観
3 ※衛　藤　瀋　吉　　日本の地方新聞に現われた日本人の中国像

4 ※関　　寛　治　　国際体系論と中国問題

XV　東アジア史における日本文化の形成過程　　班主任　西嶋

1　江　上　波　夫　　東亜史上より見たる古代日本

2　関　野　　雄　　弥生式文化と大陸文化との関係

3　西　嶋　定　生　　古代東アジアにおける国際的政治機構

4 ※井　上　光　貞　　日本における律令法の受容過程

5　甘　粕　　健　　古墳文化より見たる日本古代国家の形成

6　泉　　靖　一　　内容分析法による日本古代史研究私観

XVI　近代日本の社会と思想　　班主任　小口

1　飯　塚　浩　三
　※大　野　盛　雄　　高度成長下の日本の社会

2　川　野　重　任　　農業の地域構造

3 ※花　村　芳　樹　　工業と農業との交錯
　　――農地転用の地域的分析を中心に――

4 ※村　上　重　良　　民衆宗教の展開過程

5 ※井　門　富二夫　　教団組織と信者層

6 ※森　岡　清　美　　宗教と「家」制度

7　小　口　偉　一　　宗教と地域社会

8　※宮　川　　透
　※生　松　敬　三　　日本文化論

9　築　島　謙　三　　外国人の日本文化観

昭和40年度共同研究課題

※印　研究委嘱

I　アジア経済秩序と発展の構造　　班主任　川野

1　川　野　重　任　　アジア経済成長の類型分析
　　――台湾の事例研究――

2　原　　覚天　　アジア諸国経済発展における援助問題

Ⅱ　西アジア研究　　班主任　飯塚

1　飯塚浩二　　イスラームとアフリカ

2　小口偉一　　バハイズムの展開過程

3 ※加賀谷　寛　　西アジアにおける近代思想運動

4　大野盛雄　　イラン農村の社会経済機造

5　板垣雄三　　アラブ民族主義の歴史的展開

Ⅲ　インドにおける支配体制と社会構造　　班主任　荒

1　山崎利男　　インド古代の支配体制と社会構造

2　荒　　松雄　　ムスリム支配体制とインド社会

3　松井　　透　　イギリス植民地支配下のインド社会

4　榎本暢子　　イギリス植民地支配下の土地制度

5 ※中村平治　　独立後のインドにおける政治過程

6 ※古賀正則　　独立後のインドにおける国家資本主義

7　山崎利男　　現代インドにおけるヒンドゥー法の展開

8　中根千枝　　現代インドにおける家族構造と血縁・婚姻組織

Ⅳ　新旧両大陸における文明起源の比較研究　　班主任　泉

1　江上波夫
　※曽野寿彦
　深井晋司
　※増田精一
　松谷敏雄
　※三宅俊成
　　メソポタミアにおけるジャルモ期よりウバイド期にいたる文化の変遷

2　泉　　靖一
　※増田昭三
　※寺田和夫
　　中央アンデスにおける形成期文化

3　江上波夫
　泉　　靖一
　　文明起源の比較研究における問題点

Ⅴ　デリー諸王朝時代の建造物の研究　　班主任　荒

1　山　本　達　郎　　建造物よりみたインドおよびイスラーム文化の交流と変容

2　荒　　松　雄　　デリーに現存するサルタナット時代の遺跡の歴史的研究

3　月　輪　時　房　　ヒンドゥー・イスラーム建築技術の交流と展開

Ⅵ　東南アジア研究　　班主任　橋本

1　山　本　達　郎　　ヴェトナムの村落と土地制度

2　築　島　謙　三　　マライ人村落の自治体制

3※和　田　久　徳　　東南アジア華僑社会の変遷

4※大　林　太　良　　インドシナ半島の葬制

5※関　　寛　治　　タイ国の政治過程

6　橋　本　秀　一　　セイロンの国民所得と産業連関

Ⅶ　中国古代の政治機構　　班主任　関野

1　松　丸　道　雄　　殷周時代の国家構造

2　関　野　　雄　　先秦諸国の経済機構

3※小　倉　芳　彦　　戦国秦漢期の政治思想

4※西　嶋　定　生　　皇帝制度の成立

5　松　本　善　海　　唐代の坊里制と隣保制

6※堀　　敏　一　　中国古代末期の支配体制

Ⅷ　中国における農村機構の史的研究　　班主任　松本

1※周　藤　吉　之　　宋代郷村制の変革過程

2※柳　田　節　子　　宋代江南デルタ地帯の土地所有制

3　浜　島　敦　俊　　明清江南デルタ地帯の水利灌漑

4※小　山　正　明　　明代税役制と農村の変化

5※田　中　正　俊　　明清時代における農村の階級構成

6　松　本　善　海　　清代中期における保甲法の展開

7 ※西　川　正　夫　　清末民国初期における農村機構

8　佐　伯　有　一　　中国革命前夜農村における土地関係

Ⅸ　中国における仏教と道教　　班主任　窪

1 ※泰　本　　融　　吉蔵における中観思想の形態

2 ※塩　入　良　道　　中国仏教における人間観

3　鎌　田　茂　雄　　圭峯宗密の思想

4　窪　　徳　忠　　全真教の成立とその性格

5 ※野　田　幸三郎　　仏教儀礼の研究

Ⅹ　中国絵画の伝統の創造　　班主任　米沢

1　鈴　木　　敬
　米　沢　嘉　圃
※川　上　　涇
※戸　田　禎　佑
　　〝中国絵画に於ける伝統と創造〟（清時代前期絵画を中心として）

Ⅺ　中国の思想と文学　　班主任　窪

1 ※丸　山　　昇　　1920年代の文学

2 ※小　野　　忍　　清末の文学

3 ※野　村　浩　一　　五四運動期の思想

4 ※竹　内　　実　　1930年代の文学

5 ※近　藤　邦　康　　清末民初の思想史的考察

6　木　山　英　雄　　新文学と旧文学の関係

7 ※新　島　淳　良　　抗日戦争期の辺区における文学

8　山之内　正　彦　　中晩唐の詩

Ⅻ　中国近現代史の研究　　班主任　佐伯

1　山　下　米　子　　中国民族解放運動史の研究
　　――第二次国内革命戦争と抗日運動――

2　佐　伯　有　一　　労農運動と中国大革命

3 ※野　沢　　豊　　抗日戦争期の政治過程

4※古　島　和　雄　　中国官僚資本の形成とその構造

XIII　現代中国および朝鮮の法と経済　　班主任　福島

1　福　島　正　夫　　民主集中制とその矛盾

2※針　生　誠　吉　　人民民主独裁の法理

3※本　橋　　渥　　中国および朝鮮の経済成長とその機構の比較研究

4※常　盤　絢　子　　社会主義経済建設における後進国型とその中国的展開

5※福　島　　裕　　人民公社の形成過程

6　梶　村　秀　樹　　現代朝鮮経済政策史

XIV　中国の国際関係　　班主任　福島

1※坂　野　正　高　　英国外交官の中国観

2※衛　藤　瀋　吉　　昭和二，三年の山東出兵と国際環境

3※関　　寛　治　　国際体系論と中国問題

XV　東アジア史における日本文化の形成過程　　班主任　江上

1　江　上　波　夫　　東亜史上より見たる古代日本

2※西　嶋　定　生　　古代東アジアにおける国際的政治機構

3※井　上　光　貞　　日本における律令法の受容過程

4　甘　粕　　健　　古墳文化より見たる日本古代国家の形成

5　泉　　靖　一　　内容分析法による日本古代史研究私観

XVI　近代日本の社会と思想　　班主任　小口

1　飯　塚　浩　二　　高度成長と就業構造の変化

2　大　野　盛　雄　　日本漁業の地域的構造

3　川　野　重　任　　農業の地域構造

4※花　村　芳　樹　　工業と農業との交錯

——農地転用の地域的分析を中心に——

5 小口偉一
※柳川啓一
※井門富二夫
※森岡清美
戦後における宗教集団の構造変化

6 ※宮川透
※生松敬三
日本文化論

7 ※丸山真男　近代政治思想におけるコトバの問題

8 築島謙三　外国人の日本観

昭和41年度共同研究課題

◎印　研究担当
※印　研究委嘱

I　アジア経済発展における日本　班主任　川野

1 川野重任　アジア地域経済発展の比較研究

2 ※原覚天　アジア地域経済援助における日本

3 ※滝川勉　フィリピン経済発展における日本

II　西アジア研究　班主任　飯塚

1 飯塚浩二　イスラームとアフリカ

2 小口偉一　バハイズムの展開過程

3 ※加賀谷寛　西アジアにおける近代思想運動

4 大野盛雄　イラン農村の社会経済構造

III　古代西アジアの民族と文化　班主任　深井

1 江上波夫　古代西アジアにおける穀物倉の問題

2 深井晋司　パルティア・ササン朝ペルシア時代の彫刻

3 ◎曽野寿彦　古代西アジア原始農耕集落の形態

4 ※新規矩男　古代西アジア工芸の諸問題

5 ※堀内清治　建築史上よりみたる古代西アジアの都市

6 ※池田次郎　古代西アジアの人種問題

7※増　田　精　一　　青銅器時代後期ないし鉄器時代初期の西アジア文化

8※三　宅　俊　成　　古代西アジアの彩文土器の装飾文様について

9※杉　山　二　郎　　東亜の美術に与えた古代西アジア美術の影響についての二三の問題

10　松　谷　敏　雄　　西アジアにおける農耕と牧畜の起源の問題

Ⅳ　インドにおける支配体制と社会構造　　班主任　荒

1　山　崎　利　男　　インド古代の支配体制と社会構造

2　荒　　松　雄　　ムスリム支配体制とインド社会

3　松　井　　透　　イギリス植民地支配下のインド社会

4※中　村　平　治　　独立後のインドにおける政治過程

5※古　賀　正　則　　独立後のインドにおける国家資本主義

6　山　崎　利　男　　現代インドにおけるヒンドゥ法の展開

7　中　根　千　枝　　現代インドにおける家族構造と血縁・婚姻組識

Ⅴ　デリー諸王朝時代の建造物の研究　　班主任　荒

1　山　本　達　郎　　建造物よりみたインドおよびイスラーム文化の交流と変容

2　荒　　松　雄　　デリーに現存するサルタナット時代の遺跡の歴史的研究

Ⅵ　東南アジア研究　　班主任　橋本

1　山　本　達　郎　　ヴェトナムの村落と土地制度

2◎大　林　太　良　　インドシナにおける若者宿と集会所

3※関　　寛　治　　タイ国の政治過程

4　築　島　謙　三　　マライ人村落の自治体制

5※和　田　久　徳　　東南アジア華僑社会の変遷

6　池　端　雪　浦　　19世紀におけるフィリピンの社会構造の変化

7　橋　本　秀　一　　17世紀のセイロン

Ⅶ　中国における政治機構とその基礎過程　　班主任　関野

1 ※松　丸　道　雄　　殷周時代の国家構造

2　関　野　　雄　　先秦諸国の経済機構

3 ※小　島　芳　彦　　戦国秦漢期の政治思想

4 ◎西　嶋　定　生　　唐代良賤制の研究

5 ※堀　　敏　一　　中国古代末期の支配体制

6 ◎周　藤　吉　之　　宋代郷村制の変革過程

7 ※柳　田　節　子　　宋代江南デルタ地帯の土地所有制

8 ※小　山　正　明　　明代税役制と農村の変化

9　浜　島　敦　俊　　明清江南デルタ地帯の水利灌漑

10※田　中　正　俊　　明清時代における農村の階級構成

11　松　本　善　海　　清代中期における保甲法の展開

12※西　川　正　夫　　清末民国初期における農村機構

13　佐　伯　有　一　　中国革命前夜農村における土地関係

Ⅷ　中国の思想と宗教　　班主任　窪

1　鎌　田　茂　雄　　隋代の仏教と道教

2 ※泰　本　　融　　中国の論理思想と中観

3 ※野　田　幸三郎　　日本における中国宗教の受容過程

4 ※塩　入　良　道　　仏教における性悪思想の展開

5　窪　　徳　忠　　11, 12世紀における道教思想の形成

6　江　島　恵　教　　中観思想の形成

Ⅸ　中国絵画の伝統と創造　　班主任　米沢

1　鈴　木　　敬
　米　沢　嘉　圃
　※川　上　　涇
　※戸　田　禎　佑
　〃中国絵画に於ける伝統と創造〃（明代呉派の成立について）

Ⅹ　中国の思想と文学　　班主任　尾上

1 ※近　藤　邦　康　　清末民初の思想的史考察

2 ※野　村　浩　一　　五四運動期の思想

3　山之内　正　彦　　中晩唐の詩

4　尾　上　兼　英　　明清小説の史的研究

5 ◎小　野　　忍　　清末の文学

6 ※丸　山　　昇　　1920年代の文学

7 ※竹　内　　実　　1930年代の文学

8 ※新　島　淳　良　　抗日戦争期の辺区における文学

9 ※木　山　英　雄　　新文学と旧文学の関係

Ⅺ　中国近現代史の研究　　班主任　佐伯

1　佐　伯　有　一　　労農運動と中国大革命

2　石　田　米　子　　中国民族解放運動史の研究

——第二次国内革命戦争と抗日運動——

3 ※野　沢　　豊　　抗日戦争期の政治過程

4 ◎古　島　和　雄　　中国官僚資本の形成とその構造

5　加　藤　祐　三　　新民主主義革命とその権力の形成過程

Ⅻ　現代中国および朝鮮の法と経済　　班主任　福島

1　福　島　正　夫　　a）中国法の構造と性格

b）人民公社の所有制

2 ※本　橋　　渥　　中国および朝鮮の経済成長とその機構の比較研究

3 ※針　生　誠　吉　　中国国家論の基礎理論

4 ※常　盤　絢　子　　中国における社会主義経済の発展の型

5 ※福　島　　裕　　過渡期と階級闘争の問題

6 ※菅　沼　正　久　　中国の流通経済

7　梶　村　秀　樹　　現代朝鮮経済政策史

8 ※坂　野　正　高　　道治光緒年間の条約論議

9 ◎衛　藤　瀋　吉　　満州事変前における中国の対日政策

10※関　　寛　治　　中国問題のシミュレーション的研究

XIII　東アジア史における日本文化の形成過程　　班主任　江上

1　江　上　波　夫　　東亜史上より見たる古代日本

2◎西　嶋　定　生　　古代東アジアにおける国際的政治機構

3◎井　上　光　貞　　日本における律令法の受容過程

4　甘　粕　　健　　古墳文化より見たる日本古代国家の形成

5　泉　　靖　一　　日本古代における社会組織の比較研究

XIV　近代日本の社会と思想　　班主任　小口

1　飯　塚　浩　二　　高度経済成長と就業構造の変化

2　川　野　重　任　　農業の地域構造

3※花　村　芳　樹　　地方商業の諸問題
——東三河を中心として——

4　小　口　偉　一
　◎柳　川　啓　一
　※井　門　富二夫
　※森　岡　清　美　　戦後における宗教集団の構造変化

5　※宮　川　　透
　※生　松　敬　三　　日本文化論

6◎丸　山　真　男　　近代政治思想におけるコトバの問題

7　築　島　謙　三　　外国人の日本観

XV　アジア諸地域における社会組織と宗教　　班主任　中根

1　泉　　靖　一　　朝鮮における社会組織

2　中　根　千　枝　　チベットの社会組織と宗教組織

3※村　上　正　二　　モンゴルの部族制度

4※白　鳥　芳　郎　　華南の小数民族の社会組織と宗教

5◎大　林　太　良　　インドシナにおける儀礼をとおしてみた征服民族と被征服民族

附1　東　洋　文　化

第 32 号（昭和37年３月）中国特集

人民公社をめぐる法的諸問題
——あわせて中国法の諸特色をみる——……福　島　正　夫

延安整風運動——その過程・理論・意義——……新　島　淳　良

中国の労働者についての研究ノート……佐　伯　有　一

組合製糸地域の変貌過程（2）……江波戸　昭
——確氷社を中心に——　梶　原　史　朗

第 33 号（昭和37年３月）アフリカ特集

パン・アフリカニズムの一局面
——労働組合の動向を通じて——……西　野　照太郎

アフリカ史への試み——一つの素描として——……川　田　順　造

ヌビア遺跡調査旅行記……鈴　木　八　司

メイヤー「中央インドのカーストと親族」を読んで（一）……山　崎　利　男

第 34 号（昭和38年２月）インド特集

インド現代史の開幕とその基礎条件……中　村　平　治

インドの農民運動と土地改革
——全インド農民組合の成立から
土地改革法成立に至るまでの——……古　賀　正　則

1937～56年のヒンドゥー法の法典化に関する覚書（上）……山　崎　利　男

第 35 号（昭和38年３月）

土地改革の経済効果……川　野　重　任

アジア諸国の貿易収支と経済発展……原　覚　天

アソカ碑文の旅……橋　本　秀　一

第 36 号（昭和39年 3 月）朝鮮特集

朝鮮参政権問題の歴史的意義……幼　方　直　吉
延辺紀行……安　藤　彦太郎
書評：日本国際政治学会編日韓関係の展開……江　原　正　昭
W. D. Reeve: The Republic of Korea——A Political
and Economic Study——……梶　村　秀　樹
〔座談会〕朝鮮研究の現状と課題 ……旗 田　巍 ほか

第 37 号（昭和39年 3 月）中国土地制度史特集

均田制をどう見るか　　座　談　会
付・参考文献
最近の中国における宋代土地制度研究
——華山「関于宋代的客戸問題」を中心として——……柳　田　節　子
明代華北における賦役制度改革史研究の一検討……小　山　正　明
同・付記……佐　伯　有　一

第 38 号（昭和40年 3 月）イスラム特集

イスラーム社会の変動……林　　武
近代イスラームの一評価……加賀谷　　寛
「近代アラブ語」の定義に就いて……内　記　良　一
トルコ革命についての二，三の問題点……中　村　広治郎
「西アジア学」五つの方法的提案……三　木　　亘
西アジア文化史の課題……矢　島　文　夫
エジプト近代史家のプロフィル……板　垣　雄　三
回教圏研究所の思い出……野　原　四　郎
蒲　生　礼　一
田坂興道著『中国における回教の伝来とその弘通』上・下……中　原　道　子
エジプトにおけるナポレオン・ボナパルトの宣言文……板　垣　雄　三
イラン国民戦線第一回大会採択の憲章前文……加賀谷　寛 訳

第 39 号（昭和40年 3 月）日本の社会と文化特集

現代日本における宗教と政治……小　口　偉　一

日本観の省察——ハーンからオールコックをふりかえって——…築　島　謙　三

《日本近代化論》の世界観的前提 ……宮　川　　透

〔座談会〕

中根千枝「日本的社会構造の発見——単一社会の理論」

（『中央公論』5 月号，1964年）をめぐって

第 40 号（昭和41年 3 月）

明治末期における集落神社の整理

——三重県下の合祀過程とその結末——……森　岡　清　美

大戦間のインド藩王国——連邦構想との関連において——……古　賀　正　則

マラヤ統治の推移

——「マラヤ連合」から「マレーシア」まで——……築　島　謙　三

第 41 号（昭和41年 3 月）

〝第三種人〟をめぐる論争……竹　内　　実

魯迅『古小説鉤沈』の問題点

——六朝小説の資料に関して——……前　野　直　彬

太平天国運動……西　川　喜久子

昭和42年10月20日　発行

東京都文京区本郷7-3-1

編集兼
発行者　東京大学東洋文化研究所

東京都板橋区板橋4-47-7

印刷所　株式会社　三　陽　社